

りんうんてい
臨雲亭の跡

市指定有形文化財（史跡）

「臨雲亭」の跡を示す石碑は、烏帽子山（赤湯地区）北側にある秋葉山の秋葉神社（※1）近くの杉木立の一隅にひっそりと建っています。

臨雲亭は、江戸時代終わりの天保年間（1830～1838）、上杉藩の漢学者松木秀美（号（※2）・魯堂^{ろどう}）が秋葉山山頂に建てた東屋^{あずまや}のことで、上杉藩の歴史の執筆などが行われました。

松木魯堂は、文政5（1822）年に家督を継ぎ、天保8（1837）年に隠居しています。「自治録」や「臨雲亭記」などの著作があり、いずれも格調高い漢文で書かれたものです。臨雲亭には、多くの文人・墨客^{ぶんじん ぼっかく}（※3）が集い、春には新緑を、夏には涼を、秋には紅葉を愛でて詩文を楽しんだとされています。魯堂が住んでいたころの臨雲亭の東側からは、眼下に白龍湖が一望でき、素晴らしい風景や魯堂や訪れた客を楽しませたことでしょう。

大蔵大臣や日本銀行総裁を歴任した結城豊太郎（赤湯地区出身）も臨雲亭を気に入り、故郷に戻った時は必ずこの地を散策に訪れたといます。結城豊太郎の号「臨雲」もこの臨雲亭に由来しています。

臨雲亭跡の東側からは、現在も白龍湖周辺の美しい景色が一望できます。皆さんも一度足を運んでみてはいかがでしょうか。



※1＝静岡県に本宮があり、火災を防ぐ「火伏^{ひぶせ}」の神として信仰されている神社。

※2＝学者・詩人・画家などが本名の他に用いる名。

※3＝詩文や書、絵画などに従事する人。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤庄一
平成29年12月1日号 市報なんよう掲載